

<開会集会>



この度、鹿児島で開催された2023年平和大会に参加し、戦争の歴史の学びと現状の平和に関して考える機会となりました。11日は開会集会、学びと交流のつどい（鹿児島の戦争と平和の歴史学習交流会）に参加しました。開会集会

リハビリ技術分会
理学療法士

塚本大輝

「なくそう！日米軍事同盟・米軍基地 大軍拡・戦争国家づくりストップ！憲法活かした平和外交を 2023年日本平和大会・鹿児島」が11月11日〜12日鹿児島市内で4年ぶりのリアル開催されました。2日間で延べ1000人が参加、オンラインでも全国300カ所で視聴されました。組合から、リハビリ技術分会理学療法士の塚本大輝さんが参加しました。感想文を掲載します。

2023年日本平和大会開催される

STOP WAR!

大軍拡反対 声を上げよう!

では衆議院議員や沖縄県知事、ウクライナや韓国の方など、様々な立場から戦争反対への思い、平和を願う思いを話されていました。また、沖縄、九州地方をはじめとして日本全国からの参加者があり、戦争や公営、軍地基地などの現状の問題と闘争について熱く訴えていた事も記憶に残っています。プログラムの中で特に印象深く残っているのが、鹿児島大空襲を実際に体験された、中 精一さんという方の戦争体験談です。当時の戦争では鹿児島の約89%が被害を受け、中さんは小学校6年生の時に空襲の被害を受けました。防空壕の中に家族で隠れましたが、砲撃された弾の一部が出入口を塞ぐように燃え上がって

<分科会>



しまい、前日の雨で防空壕の中に溜まった水を皆で必死にかけて脱出したと語っていました。また、必死の思いで生き残ったものの、その後は食糧難で辛い思いをしたようです。肉屋では牛肉を10グラムだけ注文、ところてんだけを食べる、配給でもらうザラメにはダニが湧いていた、と現在の日本では考えられないような状況だったそうです。戦争当時の生々しい話を体験された方から語っていただき、戦争の悲惨さをより鮮明に知ることができました。学びと交流のつどいでは主に知覧での特攻の歴史について学びました。当時の戦況として日本はアメリカに対して圧倒的な軍事力の差があり、打開策の一つとして特攻が提案されたそうです。特攻隊員としては10代から20代がほとんどで最年少は17歳で構成されています。形式的には志願制ですが、当時の日本の教育の影響もあり、愛国心の名のもとに

<戦闘機>



実際にはほぼ強制的に志願させられていたそうです。また、命中率は約6%であったにも関わらず、当時の日本軍上層部は若者に特攻をするよう指示していたとのことでした。この話を聞き、誰もが戦争には負けると分かった上でこのような捨て身の作戦をしなければいけない当時の若者の無念さと日本軍上層部の愚かさに落胆する思いでした。私も特攻隊員と同じ年であり、大切な家族や友人がいる中で命を無下に捨てなければいけない状況になると考えると強い恐怖感を感じました。なにより国のためなら命も惜しんではいけないと教育した当時の日本の体制に遺憾に思いました。12日は分科会に参加し、実際に知覧の地に足を運び、知覧特攻平和会館を回り、学びを深めました。平和会館の中には当時実際に使用されていた戦闘機の残骸が展示されていました。半壊していました

<パレード>



が、自分の2倍3倍もの大きさの戦闘機に言い知れない恐ろしさを強く感じました。また、特攻で亡くなられた方の遺書も展示されていました。自分の意志に反してこれから死ななければいけない状況で、どんな思いで遺書を書いていたのか想像もつかないほど残酷な事だと感じました。

2日間を通して改めて戦争の悲惨さを痛感しました。九州地方では学校で戦争関連の歴史や現状の日本の学びに力を入れているのかわかりませんが、反戦抗議などを行っている際に高校生が自分の意見を話してくるそうです。私はこれまで戦争について学校の授業やテレビ等で知っていたつもりでしたが、どこか他人事のように捉えていたと今回の平和大会を通して感じました。自分が生活している中では平和だと感じていても、近年日本では軍備拡大の動きが強く

<特攻隊員宿舍内部>



<特攻隊員宿舍>



なっており、それに伴い日本各地で軍備の被害を受けている場所が多く存在していることを知りました。特攻隊の話から当時の日本の教育は平和とは程遠い教育をしていたと思います。私はこんなにも凄惨な過去をもつ日本だからこそ、より戦争や平和について考える機会を増やし、よりよい教育によってこそ日本全体が平和に向かつて歩いていけるのではと考えます。